

終末前々主日礼拝説教 「目を上げて、見渡そう！」

日本基督教団石神井教会 2016年11月6日

【旧約聖書日課】創世記 13章1～18節

1アブラムは、妻と共に、すべての持ち物を携え、エジプトを出て再びネゲブ地方へ上った。ロトも一緒であった。2アブラムは非常に多くの家畜や金銀を持っていた。3ネゲブ地方から更に、ベテルに向かって旅を続け、ベテルとアイとの間の、以前に天幕を張った所まで来た。4そこは、彼が最初に祭壇を築いて、主の御名を呼んだ場所であった。

5アブラムと共に旅をしていたロトもまた、羊や牛の群れを飼い、たくさんの天幕を持っていた。6その土地は、彼らが一緒に住むには十分ではなかった。彼らの財産が多すぎたから、一緒に住むことができなかったのである。7アブラムの家畜を飼う者たちと、ロトの家畜を飼う者たちとの間に争いが起きた。そのころ、その地方にはカナン人もペリジ人も住んでいた。

8アブラムはロトに言った。「わたしたちは親類どうしだ。わたしとあなたの間ではもちろん、お互いの羊飼いの間でも争うのはやめよう。9あなたの前には幾らでも土地があるのだから、ここで別れようではないか。あなたが左に行くなら、わたしは右に行こう。あなたが右に行くなら、わたしは左に行こう。」

10ロトが目を上げて眺めると、ヨルダン川流域の低地一帯は、主がソドムとゴモラを滅ぼす前であったので、ツォアルに至るまで、主の園のように、エジプトの国のように、見渡すかぎりよく潤っていた。11ロトはヨルダン川流域の低地一帯を選んで、東へ移って行った。こうして彼らは、左右に別れた。12アブラムはカナン地方に住み、ロトは低地の町々に住んだが、彼はソドムまで天幕を移した。13ソドムの住民は邪悪で、主に対して多くの罪を犯していた。

14主は、ロトが別れて行った後、アブラムに言われた。「さあ、目を上げて、あなたがいる場所から東西南北を見渡しなさい。15見えるかぎりの土地をすべて、わたしは永久にあなたとあなたの子孫に与える。16あなたの子孫を大地の砂粒のようにする。大地の砂粒が数えきれないように、あなたの子孫も数えきれないであろう。17さあ、この土地を縦横に歩き回るがよい。わたしはそれをあなたに与えるから。」

18アブラムは天幕を移し、ヘブロンにあるマムレの樅の木のところに来て住み、そこに主のために祭壇を築いた。

【福音書日課】マタイによる福音書 3章7～12節

7ヨハネは、ファリサイ派やサドカイ派の人々が大勢、洗礼を受けに来たのを見て、こう言った。「虻の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。8悔い改めにふさわしい実を結べ。9『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな。言っておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことができになる。10斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。11わたしは、悔い改めに導くために、あなたたちに水で洗礼を授けているが、わたしの後から来る方は、わたしよりも優れておられる。わたしは、その履物をお脱がせする値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。12そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、穀を消えることのない火で焼き払われる。」

旅する《アブラハムの子ら》の教会

「週報」に「終末前々主日」という用語を記させていただきました。わたしたちの教団では、「新しい教会暦」というカレンダーが用いられていますが、同時に古くからより広く用いられている伝統的な「教会暦」も併用しているところがあります。今日からは伝統的な教会暦で一巡りの終わりの三主日で、「終末三主日」などと呼ばれる期節に入りました。最後の主日を「終末主日」と呼ぶので、その前の主日を「終末前主日」、さらに前の主日を「終末前々主日」などと呼ぶのです。今日は、その「終末三主日」の最初の主日、「終末前々主日」です。

教会暦の一巡りの終わりに、教会は、キリスト者と教会の歩みが、いつも神の御業の完成される《終わりの日》に向かって進んでいくものであることを、繰り返し確かめてきました。その歩みは、《天の故郷》を目指していつまでも続けられる旅のようなものです。教会は、《旅する神の民》です。わたしたちキリスト者と教会は、旅の途上にある共同体であり、《天の故郷》の完全な《神の国》を目指して、地上の旅を続ける者。どこかに安住してしまうのではなく、つねに仮住まいの寄留者で、どこにいてもどこか「よそ者」扱いされるような「旅人」。決して、旅の初めに出て来たところに戻るのではなく、目的地である《天の故郷》をはるかに望み見ながら、今日の一步を前に進み出ていく。

ヘブライ人への手紙(11章)には、そのような旅人としての歩みが、旧約の物語に描かれている信仰者たちから始まり、キリスト者に引き継がれているものと教えられています。その《旅人》として生きた信仰者の父祖と言ってよいのが、今日わたしたちが旧約の御言葉によって思い起こしている「アブラハム」です。

アブラハムと言いましたが、今日の御言葉では「アブラム」です。これが本来の親に与えられた名です。物語が進んでいく中で、アブラムは、神から与えられた「アブラハム」という名を、自らの名として選び取って行きました。しかし、それは、まだ先の話です。この人の信仰の旅路は、まだ親に与えられた「アブラム」という名によって生きていたときに、始まりました。すでに75歳になっていました。75歳になってはじめて、「アブラム」という名を与えてくれた父親の家を離れて、旅を始めたのです。

それまで、アブラムは、父親の家に留まっていた。結婚しても、そこに留まり続けていました。それは、一概に悪いことではなかったでしょう。ところが、アブラムは、75歳という年齢に至って、父親の家を離れ、旅を始めたのです。「主なる神が、お呼びくださり、お命じになられた」と信じ、主の言葉に従う歩みへと踏み出す決心をしたからです。

使徒パウロは、今日朗読されなかった使徒書日課(ガラテヤ書3章)で、わたしたちキリスト信者は、このアブラハムの「子」なのだと言っています。教会は、主の言葉に従って、それまで安住していたものを捨てて、離れて、新しいところへと一步を踏み出し、旅を続けた、このアブラハムの「子」らの集まりです。そのような一步を踏み出す旅の歩み方を、わたしたちは教会で学び、互いに歩調を合わせながら、この旅を共に進んで行こうとしているのです。

自分で決められない？

アブラムは、75歳で神の言葉を自分に語られている御言葉として受けとめ、その御言葉に従って行く決心をしました。教会にも、生まれたときから教会生活をしている者ばかりでなく、年齢を重ねてから、それこそアブラムの年齢に達してから、教会生活を始め、信仰の歩みに入られる方があります。そのような方の決心は、やはり貴いものです。人生の経験を積み重ね、この世の影も光も知った上で、信仰を選び取る。そのような方が教会に与えられていることで、わたしたちは、この道が確かなものであると、さらに強く確信し得るのだと思います。

もちろん、わたしのように信仰者の両親の家庭に生まれ育ったからといって、まっすぐ迷うことなく信仰の道を進むようになるわけではないでしょう。実際には、皆だれにでも、信仰の道を自ら選び取り、そこに踏み出していくまでには、紆余曲折があるのです。むしろ、「親の信仰」の中で生まれ育ったからこそ、どこかで、その「親」から信仰的に自立することが必要になってくる。「親の信仰」から離れて、「自分の信仰」を一步、踏み出していくときを迎えられないでいると、アブラムのように75歳まで「父の家」に留まって、自らの信仰の旅を始めない、ということになってしまうのです。

わたしたちのそれぞれの家族の中に、そのようなところに留まってしまっている者が、どれだけいることでしょうか。わたしたちは皆、どこかで、「信仰の親離れ」が必要なのです。けれども、たとえ「信仰の親離れ」しない家族が歳を重ねても、わたしたちは、あきらめる必要はありません。アブラムが「信仰の親離れ」をしたのは、75歳でした。それでも、決して遅すぎることはなかったのです。そうは言っても、わたしたちは、「信仰の親離れ」が進まない理由、というよりも「信仰の道に自ら踏み出す一步」が始まらない理由も、ときには考えてみなければいけないかもしれません。

アブラムは、75歳まで「信仰」なしで生きてくることができた人でした。そう思って生きている人は、世の中に少なくありません。「信仰」などに頼らなくても、自分の力で生きていける、と考えてしまうことが、わたしたちにもあるのですから、そう考える人がいるというのは当然のことです。そのような考えを裏返して言えば、「信仰には自由がない。信仰に縛られたくない」という考えかもしれません。事実、批判的な人であれば、「神に盲従するのは愚か者のすることだ」と言って攻撃してくることもあるでしょう。しかし、それは本当でしょうか。

アブラムは、75歳で**主の言葉に従って採立った**（創 12:4）のです。神がお示しになるところ、神から与えられたところに進んでいく旅を、始めたのです。それまで、アブラムは、何でも自分で考え、自分で判断し、自分で決めて、物事を実行してきていたでしょう。その点で、アブラムは、この世で成功するための思慮と実行力に長けていたと想像されます。そのアブラムが、「主の言葉に従う」という歩みを始めた中で、わたしたちにも憶えのある一つの葛藤を抱いたのです。

「自分の進むべき道を、自分で決めてよいのだろうか。それとも、ただ、主の示しがはっきりと与えられたときだけ、そこに進んでいくべきなのだろうか。」

選び取ってよい！

アブラムは、主の言葉に従い始めて間もなく、エジプトに移住していました。その地で、妻のお陰もあってファラオに取り入り、一財産築くまでになっていました。それは、アブラムにとっては、特別なことではなかったかもしれません。彼は、飢饉という環境変化にしっかり対応して、自分と家族にとって最善の選択をしてエジプトに移住していたのです。自分で選び取ったエジプトでの生活で成功を収めるために、努力もしたでしょうし、それ以上に、成功する素質や能力を持っていたのが、アブラムでした。けれども、そこで、成功者にありがちな落とし穴がありました。妻の身上のことでファラオに疑いをかけられ、エジプトを去らなければならなくなったのです。それでもアブラムは、エジプトで得た財産を一つも奪われることなく、すべてを手を持って、出てくることができたのです。

アブラムは、このまま、他の土地に移住した後も、以前のようにこの世で成功を重ねていく生き方をするのができたのかもしれませんが。ところが、彼は、エジプトを出たその足で、あるところに向かいました。かつて神からの呼びかけに従って出て行った先で祭壇を築いて礼拝をした場所です。「主の言葉に従う」道を歩み始めた原点に、アブラムは立ち返ったのです。しかし、それは、敬虔な悔い改めの思いからということではなかった。アブラムは、「主の言葉に従う」と「自分で決断し選び取る」との間にある葛藤に答えがほしかったのです。

アブラムには、そのとき、財産が増したことによって、旅の初めから伴っていた甥のロトとの間に争いが生じ始めていました。アブラムは、そのロトと別れていくことを決めました。自らそうすることを選び取っていました。けれども、別れた後、どちらに進んでいったらよいか、アブラムは、自分で決められなくなっていました。仕方なく、彼は、ロトに行く道を決めさせ、自分はそれとは違う道に行くという消去法を選んだのです。自分で選ばない方法を取ったのです。

それは、かつてのアブラムであれば、あり得なかったことかもしれません。彼は、自ら考え、判断し、選び取ることで、この世で成功してきたのです。それが、「主の言葉に従う」道に進み入った者として、逡巡せざるをえなくなりました。「自分で選び取ってよいのだろうか。それとも、ただ主にはっきりと示されたところにだけ、進んでいくべきなのだろうか」と。

顔を上げることもできずに俯き、うなだれていた、そのアブラムに対して、神はお答えくださったのです。「さあ、目を上げて、東西南北を見渡しなさい。それはすべて、あなたにわたしが与えたものだ。そこを自由に歩き回るがよい。」

わたしたちは、自分で自由に選び取ることがゆるされているのです。すべては、神がお与えくださっている道だからです。目を上げて見渡すかぎりのすべてのものを、神は恵みによってお与えくださっている。そのどれを選び取ってもよい。ただ、そこにあるすべてを神のお与えくださる恵みとして受け取って、生きるのです。「主の言葉に従う」道は、無限に広がっています。一本道ではない。何の制約もありません。わたしたちは、自由に選び取り、その恵みを受け取り、神の恵みのうちに留まり生きることを通して、主の言葉に従い続けるのです。